

九州支部

日本山岳会東北州支部



根子岳の天狗(東峰

《 もくじ	>
山の便り	
ーカレーライスー	i
リングワンデルング	2
根子岳山行	3
普賢岳へ	4
石立山へ	4
弥箇登山口の怪	5
総会と那須岳へ	6
支部定期総会	
開催報告	7
お知ら 9月月例山行	8
10月月例山行	8
後心	8

年の十二月末からの話である。 思ったものであった。 この三編のみで他にはみたことがない。 松本高校山岳部出身であり、その後東大薬学部に 奈氏であったが、同氏の作品で私が目にしたのは もので表題すら定かではない。 まったキチン宿で枕許にあった雑誌の中にあったり、後者は北アルプスからの帰りに飛騨古川で泊 同氏の略歴は、その文章から推察すると戦前の ただあまり面白かったので執筆者をみると朝比 前者は" 思い出の山:という単行本の一章で

岳部の中に氏が部長として写されていた記憶があ が毎月掲載されたことがあるが、東京薬科大学山 高小屋の近くに幕営していたときのことである。 誌。岳人。に全国の主な大学山岳部と部長の写真 在籍されたものと思う。昭和三十年代、山の月刊 この回想は太平洋戦争前の時代であって、 友人と二人で先発隊として穂高に入山して、 氏の文章を思い出して「なるほどそうか」と

がネパールで聞いたところでは、カトマンズの空その後はどうだっただろうかと思うのである。私 その後はどうだっただろうかと思うのである。 じみ出ていると思われるものも少なくないが思い 文章も様々である。そして書く人の人柄がよくに 朝比奈氏の。積雪期穂高岳登山。と。河童橋のほ他方日本人の作品で最も印象に残っているのは 氏の目前で墜落して、夫人はなくなったという事 とりの夜, であったが、本当であろうか。 港でヒラリー夫人の乗った小型機は離陸直後に同 出してもつい笑い出したくなるものは以外に少な いものである。 その一例としては、海外の場合では、 であった。 初登頂者のE・ヒラリー氏の"わがエベレスト であった。 ただ彼は初登頂の栄誉に輝きながら エベレス

カレーライス 本 多 夏 生

の他に回想録、紀行、随想など色々あり、その

の便りと云えば多くは山行記録だろう

15

O) 便

V)

"「おい、すまんがこの深鍋を 切迫した状態のために目がさめ 事が終わるにしたがい、次第に ああ、ああ、もうやりやがった じゃないか。止せ、止せ・・・。 れを使うのか。おい止せ。汚い 深鍋を引き寄せた。「えつ、こ 使わしてもらうぞ」そう云って 綺麗になるのが嬉しかった・・ のか。」だが私にしてみれば、 氏は友人を起こしてこう云った。 い事態に追い込まれてしまう。 て、最早一刻の余裕も許されな る様になると共に強い下腹部の ントは歪み、内張りが顔に触れ に丸めていく中に掌がだんだん く分かった・・・・ 人心地が戻ってくるのが実によ "ところがその夜強風でテ

「元日の朝はすばらしい快晴であったので、テントを片付けであったので、テントを片付けて小屋の隅上往復に出かけたが、奥穂の頂上往復に出かけたが、奥穂の頂上往復に出かけたが、整部隊が登ってくるのが確認された。登頂を無事終わり小屋にれた。登頂を無事終わり小屋にれた。登頂を無事終わり小屋に戻ると、後発部隊はもう小屋に戻ると、後発部隊はもう小屋にかった。

事の次第を説明すると、皆怒るるではないか・・・・。 驚いてンロにあの深鍋がかけられていい ふと土間をみると片隅のコ

まーい」・・・。こうしてそこまたも皿を割った。すると「にと割る方も引っ込みがつかず、まーい」と号令をかけた。する

するとY氏もしたたかで「いちライス用の皿を一枚叩き割った。テーブルに積んであったカレー

ないか・・・」

いいのに。こっちはてっきいり
にとならちゃんと捨てておけば
ことならちゃんと捨てておけば

この一行はその後悪天候のた

以下・・・"大晦日に私

は白

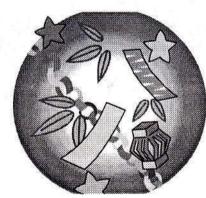
ある。 め小屋に閉じこめられ、わずかめ小屋に閉じこめられ、わずか

としておこう)云った一言に流 中の誰かが(ここでは一応Y氏 居候していた山の悪童共と記し 後に、河童橋の近くにあったレ として怒りを爆発させ、傍らの 石の堀田氏も切れたのか、突如 だ聞き流していたらしい。その の堀田氏はニヤニヤしながらた 々云いたいことを云う一方、当 やっかみもあったらしい。皆夫 分でムシャクシャしていたし、 トンビに油揚げをさらわれた気 縦走をと狙っていた連中だけに、 てあった。ただ我こそはこの初 田氏と共にレストランの二階に その時ここに居合わせたのは堀 ストランであった話なのである。 走に堀田弥一氏らが成功した直 それは、北鎌尾根の冬季初縦

> けであった。 けであった。この時レストランの小父さんと小母さんはあ割ってしまった。この時レスト割り続け、数十枚全部をしたのにあった皿をガチャーン、ガチにあった皿をガチャーン、ガチ

の時の面々は同じ場所で再会し、 った。話はここまでで、戦後こ け降り雪崩出たということであ 逃げたぞ"そう云って階段を駆 おい、奴はいないぞ、どこに行 とばかりにY氏を先頭に階段を まった。一方残った連中は憤懣 田氏は二階にさっさと上がり階 わりであった。 ね"という微笑ましい場面で終 小母さんが"あんた、Yさんだ どこに行った・・きやつは外に った"と押入れを開け"居ない、 っさに左側の部屋に駆け込み" 駆け上がった。するとY氏はと ただならぬ様であったが、誰と 段の右側の部屋に入って寝てし 云うこともなく"やっちまえ" 皿がなくなってしまうと、

のは淋しいものと思うのである何があったかを知る人も居ないる人は変わってしまい、過去にているであろうが、ただ往来す



ングワンデルング

野村芳雄

山岳遭難の原因の一つで有名なものにリングワンデルングRingwanderruかのRingwanderrungR山岳百科事典(山と渓谷社)によれているつ場所をそれと気づかずに輪局一場所をそれと気づかずに輪局の行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほの行動の後、出発した地点とほどは、は、いいのである。

である。 そこの場合原で食のドコウンはない るという。 は地点を数回通過することもあば来す るという現象をいい、時には同

多くの場合悪天候の冬山や、夏期でもガスに捲かれたような視界の悪い条件下あるいは広い尾根筋や特徴的な目標物の無い尾根筋や特徴的な目標物の無いをおれている。同じ地点を回遊験されている。同じ地点を回遊か反時計回りのこともあるが、どういうわけが入りで、その方向は時計回りのこともあるが、どういうわけで、その場合悪天候の冬山や、

また不思議なことは必ずといっていいほど同じ出発地点に帰っていいほど同じ出発地点に帰ってれはひょっとすると人間の三半器官あるいは大脳半球の機能と何か関係があるのかななどときのが疲労とそれを確認したときの物疲労とそれを確認したときの特神的打撃とにより遭難に繋がるとされる。

登山者の中には規模の大小は、条件下ではなく、秋の日の上を条件下ではなく、秋の日の上が徒労であっただけにその場での精神的、肉体的打撃はすべての精神的、肉体的打撃はすべての場にが後労であっただけにその場にかって私も一度だけこのような、類似のことを経験したとのようが、類似のことを経験したが、類似のことを経験したが、類似のことを経験したが、類似のことを経験したが、類似のことを経験したが、類似のことを経験したが、類似のことを経験したが、類似のことを経験したが、類似のことを経験したが、対の日の上

今日まで至ったが、三十年も前 たのか皆目見当がつかない。極 何故あんなことになってしまっ 視界だけは不良であった。当時 持にもなっている。 あえて述べておきたいような気 ような年齢になり、恥を忍んで の話で少しなつかしさも覚える て誰にも言えずないしょにして ってしまったため、恥ずかしく めて良好な山行条件のもとにや もそうであったが、今考えても

当時熊本市に居住していた関係 生林が残る脊梁の名にふさわし の国土地理院発行二万五千分の の所と自負していた。この地方 も知りつくした自分の庭くらい 域に入り、大げさにいえばどこ もあり、なにかといえばこの山 ており、そのお陰でかなりの原 辺で、椎矢林道がまだ開通して 一地図はまだ完成しておらず、 い魅力ある山域でのことである。 おらず営林署の伐採も中断され 場所は九州脊梁山系国見岳周

れより内大臣川に沿ってトロッ 釣り橋を渡った記憶がある。こ の早朝であった。緑川に架かる の跡が鉛筆書きされている。 図があり、もちろん一色刷り右 昭和三十年発行の5万分の一地 コの軌道跡をうんざりするほど 内大臣橋はまだ出来ておらず、 を降りたのは快晴の秋真っ盛り をたよりにリングワンデルング ばり出して眺めてみると、記憶 書きである。当時の地図を引っ 友人と二人で津留越のバス停

> 三方山、久保息のピークを経て 鴨猪川を下り、再び津留越に至 山頂から県境尾根をつたい高岳 んぱった。山行計画は、国見岳 まれ国見岳五合目の水場までが が、早朝に出発し好天にもめぐ らず工事中であった。広河原ま 椎矢峠の林道はまだ完成してお 葉村とを結ぶ九州最高点を通る 歩く。後に開通した矢部町と椎 ではたっぷり一日行程であった るものであった。

県境尾根には少なくとも途中ま 場にはサンショウウオがもぞも としていたことに後で気がつい では立派な踏み分け道がついて 度かやって来る機会があったが、 分らが間違っているなどとは少 境尾根を間違えたことから始ま く国見山山頂に到着、ここまで ぞしていた。翌早朝出発、難な いるのに、これをまったく見落 は計画通りであった。問題は県 しも考えていなかった。後日何 ったわけであるが、その時は自 五合目の水場近くに設営、水

この間は天気は良いとはいえヤ ここで踏み跡を発見している。 屋谷の最上部まで下っている。 七七メートルピークに這い上り、 これより雷坂分岐点のある一五 気持ちでヤブコギを始め上ノ小 の跡を辿ってみると、まず山頂 気を出してリングワンデルング いし、こんなものだろうという から西に下る尾根を県境と勘違 当時の山行地図をたよりに勇

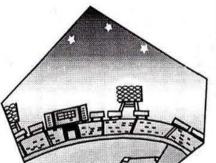
の登山道を下っている。ここで 河原から国見岳へ至るもう一つ 向とはまったく逆方向へ進み広 み跡に魅力を感じたのか、ある ブコギの後で楽そうに見える踏 ブの連続に大汗をかき少々閉口 いは何を勘違いしたのか目的方 している。これより北に稜線を

状態となった。 を見合わせものも言えずに放心 はからから、しばし二人とも顔 っかき傷だらけ、水は不足し喉 わけである。暑さと汗と体中引 ことはない一日中ヤブコギして 見覚えのある場所に到着、何の 〇メートルも歩いたろうか何か 立派な山道に出会う。これを一 測していたので再びがむしゃら ここには踏み跡は無いことは予 見、今度はこれを三方山と思い、 いがする。眼前に大きな山体を 込んでいたことに顔の赤らむ思 間から見てこれを椎矢峠と思い 工事中の林道に出会い、行動時 ピッタリと出発地点に到着した 近く急坂のヤブとの格闘の後、 にヤブに突入している。二時間

遠く離れてしまう方が確率とし 誤ったわけであるから、これを 議さを感じてしまう。目的地を るがこの点に人間の行動の不思 ルングは文字どおり必ず出発点 べてしまったが、リングワンデ 験を恥を忍び顔赤らむ思いで述 に一度以上戻ってくるわけであ なことはなく、昔のつまらぬ経 もちろん遭難騒ぎになるよう

> ければありがたいと思っている。 以上詳細をたずねたり話題にし ら私のこの経験について、これ 頂きたいと思っている。それか じの方がおられたら是非お教え 方で、この点について何かご存 な形で残っていることが関係し 巣本能」などに類似する能力が みられる「渡り」や動物の「帰 とがあるとされ、それと気づい は地元の精通者でも経験するこ ようとしない優しさをお持ち頂 ている。本拙文をお読み頂いた ているのかなどと想像したりし ろうか。ひょっとすると鳥類に うしてこの様な事が起こるのだ て圧倒的に高いはずなのに、ど たら直ちに行動を中止し、はっ 人間にも不完全なあるいは未熟 最後に、リングワンデルング

念し、脱出か救援を待てと山岳 ず体力を消耗させないことに専 きりした方向が分かるまで動か 技術書は述べている。



(根子岳東峰山頂にて)

根 岳 Щ

四月月例山行報告)

Bol 部 和 代

どんな人と一緒かしらと胸がと きめいていた。 るので数日前から嬉しいのと、 **外しぶりに月例山行に参加す**

それぞれ車に分乗して五時五分 に七時到着。 いながら、どんどん進み登山口 に蕨を見つけて帰りになんて言 イン辺りで夜が明け、車道の側 サニーを出発。竹田のドライブ 今日は参加者が多く二一名、

足の体はきつかった。それでも 峰を見るとますます胸が高まっ やかな気分になった。 がスーツと抜け出ていって、穏 ると、きつさと日常のストレス 空に映えて美しいのを見たりす シャツの若者(?)の列が青 枯れ葉の中に咲いているキスミ 登り始めたが、トレーニング不 た。輪になって自己紹介をして レなどや尾根に出たカラフルな 朝日に輝いている根子岳の岩 V

多さはどうか、それは木々の一 色の緑はどうも…。そのまわり ない。でも眼下のゴルフ場の一 シャッターを押さずにはおられ りはいつも目で見たものとは大 生懸命の息吹だ。 の雑木林の濃いの淡いの緑色の ちこちに咲いているのを見ると、 いた木々が茂る谷に白い花があ とカメラを向けるが、出来上が きく違っている。それでも芽吹 これは素晴らしいアングルだ

書かれた大きな看板のある根子 今年は開花がとても早いらしい。 り、ヒカゲツツジが咲いていた。 返した。シャクナゲの花は終わ 直下まで行き、岩に取り付くポ できず、残念だった。天狗岩の で初めての人の顔も見ることも 狗岩のそばで昼食だが、狭い所 さらに荒れた稜線をたどり、天 くれて。東峰八時五〇分到着。 あ!私にもじわっと力を与えて 「神が授けた日本一の景色」と ーズをとり記念撮影をして引き ああ、この色の山はいいな

賢

岳

(六月月例山行報告)

甲

斐

を見渡すことの嬉しさ。特にさ 岳の展望所を通り、清栄山 つき登った山を眺めるのは気持 たくさんある道を少し登って、 口に一三時四〇分着。ツクシが がいい。 やや霞んでいるが周囲の 頂に一四時〇〇分着。

思うことは皆同じなんだ。竹田 大きなジョッキを傾けていた。 こと。土居氏の車もやってきて し訳ないが、なんとも美味しい でホルモン焼を食べ、名水を汲 転してくれている児玉氏には申 は阿蘇地ビール園に寄った。運 んで身も心も満足満足。 一十分大分着。 下山して解散するが、私たち 一九時

(一九九八,四) 一九 (日)

同行者 田尻、 児玉、 甲斐、 安藤 (セツ)、飯田、石川、 岸本、 佐藤、 渡部 継松、 阿部、 清水、 工藤、 土居、西、牧野 安藤(幹)、 田口、 小竹、

国見岳をめざす。

憩ののちロープウエー乗り場横 の登山路より妙見経由で国見岳 ぐらいの登山者に出くわす。休 仁田峠の駐車場で総勢三〇名 (雲仙国見岳山頂にて)

三五九米)である。

六月の山行は雲仙普賢岳(一

六月二十日PM七 前に集合。雨の中、 路雲仙をめざす。十日PM七時、車四台 小浜経由で仁田峠の (一三四七米) いにくの雨。

山頂に着くも、

集合。しかし雨はいっこうにや 部岳に向かう途中の登山口より 矢岳にまず登り、それから九千 観光にまわる人。 む気配なし。山行をあきらめて ぞれ今夜の宿を探す。 人は飯田さんリーダーのもと、 我々東九州支部の!精鋭!七 翌朝八時仁田峠のゲート前に

、それ さん達の車と別れ、小浜の青雲 もらったビールが旨かった。 の山頂駅で昼食。石川さんより の展望台に登り、 岐まで引き返す。さらに妙見岳 五分ぐらいで来た道を国見の分 た。あいにくの雨と強風の中。 のち頂上(一三五九米)につい 十四時三十分駐車場着。飯田 ガスの中を普賢岳をめざす。 葉茶屋跡より三十分の急登の ロープウエー

島原城行 同行者 飯田、 無事四峰に足跡を残しました。 荘で入浴後一路帰路につく。 れた日に来たいと思います。 ったのが残念ですが、今度は晴 しかし、溶岩ドームが見えなか (一九九八、六、二一(日)) 今回の山行は雨の中でしたが 後藤、斉藤、林、渡部 阿部、小竹、佐々木 石川、 甲斐、

西

○号線、三三号線、高知自動車 てひたすら国道五六号線、三八 コンビニでの買い物一回を除い 別府(べふ)峡に向かう。途中、 ら参加された戸田さんと合流し、 で八幡浜に到着、駅前で大阪か 国道一九五号線と走り続け

石 V. Ш 七〇八 m

七月月例山行報告

斎

とがなく、また、山行に参加し フェリーに揺られること2時間 ので、餃子がうまいと評判のラ だが、出港まで一時間以上ある エリーで八幡浜に上陸するわけ 乗して臼杵へ。ここから九四フ 車を換え、八名が二台の車に分 ニースポーツ前を出発、途中で 七月十八日(土)午後八時にサ 残念だ。 少し天気が崩れかけているのが ので、特に楽しみにしていたが て以来初めてのテント泊となる 横たわる石立山である。 山地の一角、高知・徳島県境に ーメン屋に入り、夕食をとる。 私は四国の山は未だ登ったこ 七月の月例山行 は四国の剣山

る。ここで、装備を固めた高校 頃に到着。空は薄暗く曇ってい 別府峡にはようやく午前四時半

から登り始め、下山はこの別府の四つ足峠トンネルの高知県側 八時三〇分に残りのメンバーで さんを車の移動のために残し、 食を済ま 峡に取ることになった。六キロ 石立山は今年のインターハイ 知らなかったが、これから登る ていた。慌ただしく身支度と朝 時に起きると、雨が降りだし 時まで仮眠を取ることにした。 があったのでテントを張り、 府峡の駐車場に車を止め、 でトンネル入口、ここに駐 トの確認を行う。我々は県境 山コースだそうである。 せる。佐藤先生と飯 N 田 車

帯を登り始める。傾斜はたいし小さな沢を渡り、杉の植林地 明日の午前零時を期しての はトンネルの徳島側からの往復 まで戻ることとなった。ルート したがどこも薮で手が付けられ 生と飯田さんも合流して道を捜 てしまったものらしい。佐藤先 はあるものの、既に廃道となっ 二万五千分の一地形図上では道 った。高度約千mの地点である。 たこともなく、道も明瞭である。 一〇時三〇分頃、 道が突然途絶えてしま 雨の中を出発点 の前までき 小さな小屋 出発

ンガローのような宿泊施設もあす。入浴料は五百円。ここはバー別府峡に戻り、温泉で汗を流と変更になる。

途せ、 だろう、少し緊張する。 る。つい数時間前に落ちたもの が、 テントを張り、休むことになっ 簡単な宴会をして午後五時には 地のあずま屋)があり、ここで ったところに格好の幕営地(園 午後十一時起床、身支度を済 風が無いのが幸いである。 雨はいぜん降り続けている 施設 府より槙田川沿いに少し遡 る。入浴後、施設のロビー 道路に落石が転がって 軽い食事をして車で出発 歓談した後、出発する まだ新しくてきれ 13

でてきている。 県境のトンネルを抜け、左手 の道を一分ほど登ると車道は行 の道を一分ほど登ると車道は行 三〇分、ここの高度は約七〇〇 mである。空は雲が切れ、星が でてきている。

雨具を脱いでしまった。
雨具を脱いでしまった。
南具を脱いでしまった。
で野りを脱いできたのである。
がガザグの登りとなる。
な左岸へ渡ると道は沢から離れを左岸へ渡ると道は沢から離れをがある。

りと黒くピークが見えてくる。 かを線上の行く手にやがてぼんやとる。空にはおぼろ月がかかり、 とる。空にはおぼろ月がかかり、 とる。空にはおびろ月がかかり、 とる。空にはおびろ月がかかり、 とる。空にはおびろ月がかかり、

の勘違いで、 われて ろう、道の上はきれいに刈り払 ら山頂までは笹が茂っているが、 先にあった。このピーク付近か ど山頂だと思ったピークは自分 屋の右手を通って登り続ける。 である。我々は休むことなく小 のの、まだまだ使えそうなもの 下界を見ると国道の灯だけ インターハイの準備としてであ く、窓は打ちつけられているも 高度は約一四〇〇m。小屋は古 空が徐々に白み始める。先ほ 五十分に避難小屋に到着。 々と連なっていた。 歩きやすい。 本当の山頂はその



かな石立山山頂に到着。空は完四時二五分、笹の茂るなだら(石立山山頂にて)

全に開け放たれた。ご来光は望を住間け放たれた。ご来光は望をなかったものの、まずまずのとなっており、その裏手は潅木の建っており、その裏手は潅木の違っており、その裏手は潅木の違っており、その裏手は潅木の道しが効かない。この方角には一三嶺、剣山が見えるはずなのだが。

三角点は祠のすぐそばに設置されている。ここで恒例の「万度撮影をした後、朝食をとる。真撮影をした後、朝食をとる。西時一五分下山開始。稜線上面の急坂を下る時点で太陽が正面の急坂を下る時点で太陽が正面の急坂を下る時点で太陽が正面がら照りつけ始め、汗ばむ。周囲の山々の谷間に押し込められた雲がどんどん上昇を始めた。をがて道は稜線を外れて急にやがて道は稜線を外れて急にやがて道は稜線を外れて急にやがて道は稜線を外れて急にやがて道は稜線を外れて急にある。

川自動車道を経由して帰ること となった。 となった。

今回の山行は夜を徹しての登 山、テント泊そして酒盛り?と めて山登りの楽しさを教えてく れるものとなった。 へ一九九八、七、一九~二〇

戸田、西戸田、西戸田、西原部、飯田、石川

簡品登山口の怪

弥

飯田勝之

五月のある日、国東半島の中央部にある小さなピークの弥箘のある。

である 国東半島にはそのど真中に半島一高い両子山があり、この山島一高い両子山があり、いくつもの稜線がやはり放射状に海に向かって下り、いくつもの稜線がやはり放射状に海に向かって走っている。その稜線上にいくつかのコブがあり、小さな峰々となっている。小門は、大嶽山、牛岳、弥箇岳…など。

目指すことにしたが、気になるを横切って稲川に抜ける林道がある。その林道の峠まで車で行ある。そこに車を止めて弥箘岳の山頂まで一時間足らずでたどりつける予定である。そこで水筒とカメラだけぶらさげて山頂をとカメラだけぶらさげて山頂を

(土、日))

味わう予定である。
いた冷したビールのことである。
中の世に置いたままでは車内の
重の中に置いたままでは車内の
はがある。それらは次に登る長
いた冷したビールのことである。

た。
とこで考えたのがどこかの木をに置いて行くという方法である。この方法はこれまでにも何度も取った方法だ。木の枝に吊度も取った方法だ。木の枝に吊度がない時は車の下に適当な日陰がない時は車の下にあった。

果物が盗られてやしないかと気 多いと、登山口に吊るしたビニ もれ日の中にビニール袋は健在 いる。もちろん下って見れば木 をもみながら下ったのを覚えて ール袋の中のビールやお菓子や に出会い、これほど人の往来が はたくさんの人が登って来るの ることにした。ところが帰りに 予富士まで足を伸ばして往復す ったが、下る途中に予定を変更 の中にある木の枝に吊るして登 ない薄暗い早朝、登山口の木立 ったときは、まだ登る人影すら し、桑瀬峠からそのまま直接伊 去年の秋、 四国の寒風山に登

ートルほどの所に地上一メート面で、林内に踏み込んで二十メれた林内のほどよい木陰の緩斜地で、きれいに間伐、枝打ちさ地で、

い。 との はなどほとんど考えられな との は気づかれることはなかろう。 との につきそうだが、車で通過する にの を歩いて通る人などあり にのはない。ましてこんな山に であばない。ましてこんな山に とうにない。ましてこんな山に とうにない。ましてこんな山に とうにない。ましてこんな山に

一次まった登山道などない山だ
 一夕に着いた。そのピークからい。急な斜面をまっすぐにやみい。急な斜面をまっすぐにやみい。急な斜面を登っていくと斜面はさらくもに登っていくと斜面はさらくもに登って。本の幹や枝や岩など中となる。木の幹や枝や岩など中となる。木の幹や枝や岩など中となる。木の幹や枝や岩など中となる。木の幹や枝や岩など中となる。木の幹や枝や岩などを楽につかまり、小鳥の声などを楽はらに乗削木をかき分けながら登って着いた。そのピークからさらに風倒木をかき分けながらから、

> 能一人訪れる気配もない静か はよいない。 は、登りに はな山頂でひと休みの後、登りに はを一つ一つ丁寧に辿りながら でかして、さて登り口の食糧デ でしっかりと切り株の上に置 いたはずのビニール袋はその影 いたはずのビニール袋はその影

缶ビールは無事である。ポリ袋 らかして半分ほど残っている。 袋も破られて、ミカンは食い散 ミカンを入れてあったビニール の漬物はほとんど減っていない。 くなっているが、タッパーの中 弁当箱の山菜おこわは一粒も無 と蓋の開いたまま落ちている。 パーが止め具を開けてパックリ 破れて落ちており、小さなタッ 発砲スチロール製の弁当箱の殼 ばっている。行ってみると薄い と思いつつ見回すと、十メート のパンは袋ごと跡形もない。 いる。ビニール袋がボロボロに がズタズタに破れて散らかって ルほど向こうに白いものが散ら って持って行ったのかな、など わずかの時間なのに誰か人が通 往復一時間半程度の間である。

は何一つ見えない。「やられた。」と思ってあたりを見回したがもちろん、人影りを見回したがもちろん、人影

るのを見るとサルのしわざにちタッパーの止め具をはずしていくのかな。サルかも知れない。が朝のこんな明るい時間に出歩か朝のこんな明るい時間に出歩

で真犯人は…。

ない。 ごと持っていって、今頃ゆっく りどこかで味わっているに違い めたとも考えられる。パンは袋 姿が消えるのを見計らってせし 私が食糧を置くのを見ていて、 あるいは一匹でじっと遠くから にその間に人間一人分の弁当を だ。さほど長い時間ではないの たら、そんなに時間がないはず 偶然にここを通りかかったとし に消えて、そしてしばらくして わざではないのかも知れない。 かしたら一匹(一羽)だけのし たいらげてしまうとは…。もし それにしても、私の姿が樹林

そんなことを考えていると特ちでデポした自分のうかつさた、それをどこかで盗み見ていて、僕の姿が消えるのを見計らて、僕の姿が消えるのを見計らってみごと食べ物をせしめるような要領の良い奴かな。それとも偶然に通りかかって獲物にありついたよほど運の良い奴かな。を巡らしてみるが分からない。ただそんなことを考えているとっただそんなことを考えているとっただそんなことを考えているとっただそんなことを考えていると

この後に予定している伊見山の方がこみあげてきた。

事となった。

事となった。

本にの後に予定している伊見山の山頂ではその素晴らた伊見山の山頂ではその素晴らた伊見山の山頂ではその素晴られて、登りついまが長い。としい眺めとは対照的に質素な食しい眺めとは対照的に質素なり。と

(1998年5月



会と那須岳へ

西 孝子

東九州も「若い会員を」と思意、役員、支部長の他は、毎年る。役員、支部長の他は、毎年長挨拶で「カンチンジュンガも長挨拶で「カンチンジュンガも長挨拶で「カンチンジュンガも長挨拶で「カンチンジュンガもる。会員で、会員平均年齢五十四歳。

う。)会計、行事の報告と計画

M四時半より懇親会。特別

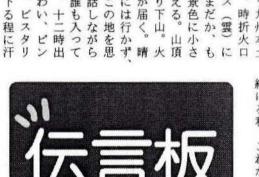
おいて、 金を…。 ネパール国際山岳博物館建設募 時間であった。皆さんお願い、 話して欲しいと思う華やいだ一 まわり。我が支部員もこの場に なる。ジュースと烏龍茶で挨拶 また今年もネパールへ行きたく 年と国際山岳博物館建設につい て流暢な日本語で挨拶があり、 にネパール大使の参加で、 すばらしい経験者と会

出れば地図とコンパスを出さね の為運転中止の札。ずるをして、 屋の気分がする広場で、ガスが 峰。茶屋は新築で無人。峠の茶 の茶屋に人影、近し、右に剣が を入れて歩く。見上げれば、峰 砂まじりの岩場をストックに力 下り、先頭の若いリーダーより やがて晴れ間。ロープウエーも ク両手に、途中、登山届けを箱 雨具を出し、公園化した道を力 高度差百メートルで山頂と計算 を駅へ。バスを降りロープウエ 高「止めたら。」を背に雨の中 線、東京発八持十五分。長男穂 肌に変わる。途中、二十人程が くの山も見える。火山特有の岩 動き始めた放送が聞こえる。近 アラサ、ドッコイショとストッ の抜けた足取りで、続く階段を した百名山も思うにまかせず。 へ。ガスで近くの緑だけが友。 「お一人ですか、頑張って。」 次の日は那須岳へ。東北新幹 駅へ。九時発一番は、雨と風 行きかう人に声をかけ

のバスの人となる。三時間半の あわてて、お花つみに。一時発 で六分という。荷物を置き、運 装道を登山口駅へ。広場にバス 下る。初夏の陽は、下る程に汗 クのツツジに見とれ、ビスタリ 発。百名山の姿を味わい、ピン 来ない。十五分休み、十二時出 二度と来ないだろうこの地を思 うかと見え隠れする景色に小さ 乗ってやって来る。まだか、も にはない高度である。時折火口 コースタイムである。 転手に出発せぬよう客に頼み、 あり、二人乗っている。出発ま 々々。途中の店にもよらず、舗 茶屋へ。中で昼食。誰も入って いつつ、朝日岳と対話しながら 天に浮かれ、山頂駅には行かず 口は見えず臭いだけが届く。晴 の石の祠に無事を祈り下山。火 より噴煙の臭いがガス(雲)に られ、我に返る。もう九州本土 い鳥居がわずかに見える。山頂

の人のやさしさに支えられ旅を あんたもここにいるの。」多く 待つ。駅前を歩いていると、バ 一駅で、 せん。」と大声でおわび。電車 る。バスの中のお客三十人以上。 かしく、バスへ。五分以上かか 物をして釣り銭を待つ間ももど 内の土産売場に行って来るのが いいですか。」「はい。」買い したい。」「できない。」「構 「皆さん、お待たせしてすみま 黒磯駅の珍事。「一万円両替 那須塩原駅で二十五分

続ける私。これからもよろしく。



定期総 会 一九九八年度) 報告

り決定された。 があり報告通り承認されたあと、 事業報告、決算報告、監查報告 が四月二五日 (土) 午後六時か が提案され、審議の結果提案通 一九九八年度事業計画、予算案 れた。総会では一九九七年度の 階視聴覚室)で、支部員二一名 ら大分市のコンパルホール(四 (委任状は別) が出席して開か 年度の支部定期総会

決定された主な事業計 月例山行 根子岳 (熊本県 画

九月 八月 渡神岳 別府湾リレー登 (前津江村·

〇月 平尾台 ・能ケ鼻(福 岡県) 中津江村)

二月 大将陣山(日田市 樋桶山 (耶馬渓町) 鬼ノ目山(宮崎県) 山国町)

一月 釣鐘山 樅木山 (宮崎県) (佐賀関町)

(二) 支部報の発行 する。 年間三回程度の発行を予定

(三) 支部四〇周年記 始することとなった。 や必要な準備を今年度から開 種記念事業を実施することと し、そのための計画の具体化 (二〇〇〇年)を記念して各 東九州支部結成四〇周年 業について 念事

1 主な記念事業 海外登山を実施する。 開催する 全国支部懇談会を大分で 記念山行として国内及び

(登山文化展のようなもの) ガイドブック『大分百山』 しは九七年定期総会で決め の改訂版を発行する。見直 大分百山の見直しを行い 記念展示会を実施する。

七月 六月 五月 月

(徳島県・高 (長崎県)

普賢岳 石立山

扇山

(宮崎県

決定する。 中心にして検討の上支部で た検討委員会のメンバー

稿を中心とする。 催に合わせて)発行する。 記念誌は支部会員の投稿原 部懇談会の開催までに(開 四〇周年記念誌を全国支

その他の決定事項

自然保護の取組みを各会

員の加入を促進すること 的に実施 中高年登山の指導を積極 若人を山に誘い、若年会

活かすこと ネパールに建設中の国際 日本山岳会の伝統を守り、

山岳博物館に対する寄付を 集 (チャーター便で実施) のトレッキング参加者を募 日本山岳会でネパールへ

ク」「アコンカグア」などのビ として、「早春のゴーキョピー デオ放映を行った。 総会終了後はアトラクション



(一般参加者も募る)

記念講演会を実施する。

お 知 5 せ

九月月例 行の

・日時 場所 雨天決行 渡神岳 (一一五〇m) 九月二七日(日) (前津江村、中津江村) 午前五時サニー出発

参加者は二五日までに事務局

にご連絡ください

きます。

時間があったら近くの山に行

0 なった鶴見山頂での行事など 闘が目に浮かびます。 は次号で報告の予定です。 ートのないコースで、ルート 部分が未整備どころか全くル 工作をされた皆さんの悪戦苦 リレー登山のフィナーレと 一番暑い季節にコースの大

さしもの賑やかさを見せた

ごろの山は秋に入っても賑や 中高年で満ち溢れているこの かになった昔の山と違って、 っと引き上げていき、急に静 夏休みが終わると学生達がさ 戻しつつあります。それでも 山々も少しづつ静かさを取り

ので今回号最終頁に掲載させ 程高低表が欠落していました 日記」の巻末に載せるべき行 さんの「シシャパンマ峰登山 かです。 ていただきました。 前回(第二号)の星子貞夫

クライミング用具(ザイル、

ハーネス等)をお持ちの方は

ご持参下さい。

·場所

平尾台・能ケ鼻

(六八〇四) (福岡県)

日時

十月十八日 (日)

午前5時サニー発

十月月例山行予定



労様でした。 取り組み。で皆さん大変ご苦 八月は別府湾リレー登山の

K I

日本山岳会東九州支部報 第3号

98年 (平成10年) 9月10日 19

発行者 編集者 発行所 梅 木 秀 飯 田 勝 〒870-0021 徳之

大分市府内町1-3-16 サニースポーツ内 西 孝子 TEL·FAX 097-532-0926

題字 佐藤正八